



図書館ボランティアだより

第33号

2019年2月 阪南市立図書館フレンズ広報部会発行

カラスノエンドウ



目次

自由*空間	「跳べた」	… P2
ご存じですか	「図書館フレンズ 配架部会の紹介」	… P2
私のおすすめ	『バルト海のほとりにて 武官の妻の大東亜戦争』 『漂流』 『海も暮れきる』 『エーミールと探偵たち』	… P3
図書館からのお知らせ		… P4

ボランティア・市民活動フェスティバルの15年

阪南市社会福祉協議会 坂上 尚大

ボランティア・市民活動フェスティバル(以下フェスティバル)がスタートしてから今年で十五年目になります。フェスティバルは毎年二月に開催しており、模擬店、ステージでの活動披露、体験コーナー、活動パネルの展覧などで、様々なボランティア・市民活動にふれていただく内容となっています。阪南市内のボランティア・市民活動を知り、活動者同士がつながろうという想いから、一回目を平成十七年三月に開催。一回目以降は実行委員会形式をとり、実行委員の皆様と一緒に作り上げてきました。今では約九〇〇人の市民に参加いただけるフェスティバルへと発展しています。

この十五年間を振り返ると、日本は超高齢社会に突入し、災害を経験したことで、ボランティア・市民活動のチカラを改めて認識しました。社会的孤立や生活困窮、障がい者差別の解消など、多様な生活課題の解決や地域でのつながりづくりにあたっては、ボランティア・市民活動への期待が高まっています。

また、深刻な課題となっている孤立の

問題に取り組みには地縁組織とボランティア・市民活動、NPO団体との協働の取り組みが欠かせません。今年のフェスティバルのテーマは「あいふれあい みんなの“わ” 世代を超えた楽しいまちに」です。

大人から子どもまで、みんなが互いに協働することで、それぞれの長所を活かした地域の助け合い、支え合いが進んでいき、誰もが住みやすく魅力ある阪南市を目指していこうというメッセージが込められています。

三月九日(土) 午前九時半から午後三時まで

阪南市地域交流館で開催しますのでぜひ、一度遊びに来てみてください。



跳べた！

自他とも認める私の「不器用」は、今に始まったことではない。子どもころから運動が苦手、自転車にも乗れないままである。不便ではあるが不思議と自分を落ちこぼれだと思っただけではない。そんな私にもキンモクセイが咲くと思ひ出すことがある。

あれは、小学校五年の体育の授業だった。その日が初めての「跳び箱」 嶋先生の笛の合図で男子から飛び始めた。次は女子の番になる。私はだんだん緊張が高まっていくのが自分でもわかる。すでに身体が固まっている。跳べない子にアドバイスをしながら笛を吹き続ける先生。

ついに私の番がきた。
（ああ、びしょしょ、よう跳ばん。怖い）

勢いをつけて走った。踏切板の上で足が止まる。跳び箱に両手を置くことさえできない。うつむいて

泣きそうになるのをこらえて元の列に戻る。繰り返し練習をするうち、みんな跳べるようになっていった。（チャイムが鳴って、この体育の時間が終わりますように）

先生はまだ跳べない私と数人の子を残して、跳べたみんなを跳び箱の周囲に集め始めている。

「さあ、一人ずつチャレンジ開始」

先生の大きな声が私の心臓を突き刺した。再び緊張する。一人また一人と減っていく。あとは私だけ。ポツンと別世界へ置き去りにされた焦りと恥ずかしさが、ジワッと胸に染みてくる。もっどこにも逃げ場がない。

いよいよ、最後の挑戦。「ガンバレ」「がんばって」と、聞こえてくる。今度こそ跳ばなければ、追い込まれた思いだけが、辛うじて折れそうな心を支えていた。力

いっばい息を吸う。跳び箱に向かって走る。思いきり踏切板を蹴った。

「ウワーツ、跳んだ」「跳べた」

みんなの声が、拍手が、私を包みこむ。私はしばらくその場で茫然と立ち尽くしていた。嬉しいはずなのにその記憶はない。ただ、飛び越えた跳び箱をぼんやりと見ていたことだけを覚えている。魔法にかげられたように私のなかで時間が止まっていた。夏 礼子



《ご存知ですか》

図書館フレンズ 配架部会の紹介

図書館フレンズは、部会がそれぞれ作業内容、時間帯も異なりますが、自分の都合の良い日時で作業内容を選べます。

配架部会は返却された本を書棚に戻し、本の分

類、番号、記号などで定位置に戻します。

開館1時間前の作業で内容は簡単なことですが、結構運動にもなり、本との出あいも楽しく活動しています。

豊田 紀美代

私のあゆみ

先日、十代の頃、父から薦められた『漂流』を読み返す機会があった。江戸時代、シケに遭い黒潮に流され、高知から伊豆諸島の鳥島(東京から約六〇〇km)へ船が漂着する。そこは水も湧かない無人の火山島でも人が生活できる場所ではなかった。そんな中で、主人公の「長吉」は島に生息するアホウドリや魚や貝などを食べ、アホウドリの卵の殻に飲み水を貯め、生きるために知恵を働かせ、やがて

十二年に及ぶ無人島生活の後、故郷の高知へと帰還するのであった。同じ船の仲間が亡くなり、ひとりぼっちとなっても、「長吉」は生きて故郷に帰るといふ気持ちを決してあきらめない。彼の強い精神力に、何事も簡単にあきらめてはならないということを改めて考えさせられた。

読み返してみても、新たな発見があった。江戸時代、鳥島に漂着し大半が死亡したが、幸運にも帰還できた者もいる。その中に和泉国箱作村(大阪府南海町箱作村)と和泉国波有手

村(大阪府南海町波有手村)の船が帰還できたと記録に残っているというのであった。

そしてもう一つ同著者の『海も暮れきる』を紹介したい。酒に溺れ大切なものを失い、人から信頼されなくなり病魔に蝕まれ、死への道を進んだ俳人「尾崎方哉」について書かれた作品である。最後まで生きることがあきらめなかった「長吉」とは対照的な主人公の生き様だった。生きるということについて考えさせられる二つの作品である。

石川 智子



子どもの本が好きな者にとって小野寺百合子は『ムーミン』や絵本『ペレのあたらしいふく』の訳者としてなじみの人です。

一九八五年十二月「日本開戦不可ナリ」というドキュメンタリー番組がNHKから放映されました。実現しませんでした。終戦の

和平工作をしていたスウェーデン駐在武官小野寺 信をとりあげた番組でした。この番組で私は小野

戦後七十三年、私たちは国民皆兵

による軍人軍隊のない生活を営んでいます。国民の大多数は戦争の記憶はなく、映像、番組によってしか知るすべはありません。

「滔々たる時の流れには、一個の人間はどのようにも抗し切れるものではない。一片の木片は波に押し流さ

れ水中に消え去ってしまうことが多い。だがその木片が正しいと信じて努力した行動の軌跡は正確に記録に泊めておくことに或る意味がある」と考える著者の信念からこの本は生まれました。闇の中に葬らず書き残されたのがこの本です。この本は私たち一人一人の思いでもあ

黒見 泰子

『エーミールと探偵たち』 エーリヒ・ケストナー 著 岩波書店 T-K943 77

母と暮らすエーミールは、ベルリンの祖母を訪ねる途中、大切なお金を盗まれてしまう。現地の子どもたちの協力を得て始まった追跡劇。古今東西、子どもたちが活躍する探偵小説は数あるが、“だけ”というものはあまりない。ケストナーの描く子どもたちはいつだってみんな魅力的だ。勇気があって知恵があって行動力がある。悪党を懲らしめるには、これだけあれば十分で大仰な仕掛

けは必要ない。物語の終盤、電話番号という地味な役回りを務めたディーンスタークをおばあさんが称賛する場面には感動する。この言葉で彼の心はどれだけ救われたか。成功の裏には目立たないところで頑張ってくれた人がいること、信用できる人とできない人がいること。大切なメッセージが沢山詰まっている。ぜひ合言葉は「エーミール！」と唱えてみよう。

谷本 裕子

図書館でボランティアしませんか？

2019年度

図書館フレンズ募集

老後・退職後に図書館でボランティアをしていただける方、もう子どもの手も離れて、時間があるから何かしたいという方、学生時代にボランティアをしたい方、図書館フレンズとして活動してみませんか？初めての方も大歓迎。誰でもできる簡単な作業から、才能を生かせる作業まで色々な部会があります。

今回募集する図書館フレンズの作業部会は、返却本を本棚・書庫に戻す配架作業、本の修理など行う図書整備、生け花緑化整備、児童コーナーのコルクボードなどへの装飾作成、広報関連などです。詳しい作業内容や時間は、図書館内チラシをご覧ください。下記の説明会後に、入会するかどうか決めていただけますので、興味のある方は、説明会にお越しください。

説明会日時：平成31年3月26日(火) 午前10時

(説明会が終わった後、参加ご希望の方には入会の案内があります)

場 所：サラダホール2階・視聴覚室

申込期間：3月1日(金)～3月24日(日) 開館時間中 電話申込可

- * 無償のボランティアです。交通費等の支給はありません。
- * ボランティア保険はこちらで加入します。
(すでに同様の保険に入っている方は対象外です。)
- * この説明会は、新規の方(阪南市に在住・在勤・在学の方)が対象です。



思い立ったが吉日！説明会に来られないという方も、ぜひ声をかけてください。
(図書館フレンズは随時加入できます)

お問い合わせは

阪南市立図書館

電話072-471-9000

図書館フレンズ担当まで